

風神雷神

柳 広司

最近ようやく秋らしくなってきましたね。みなさんは、どんな 秋を過ごしていますか？今回は芸術の秋として、「風神雷神」を紹介したいと思います。この本は風の章、雷の章の2冊で構成されています。主人公は「風神雷神図屏風」を描いた依屋宗達。「琳派の祖」とも言われています。日本史で名前や作品名は目にするけれど、どんな人だったのか全然わかりません。それもそのはず、彼の詳細は未だ不明とされています。しかしこの本を読んでもと、とてもいきいきとその時代のこと、宗達のことが書かれていて、自然にその世界に入り込んでいくことができました。

依屋宗達は、京都の扇屋のぼん。ぼうっとした性格で、絵を描くのは上手なのですが、商売には関心を示しません。慶長7年、宗達はひょんなことから「平家納経」の仕事に携わることになり、安芸国で補修作業を手伝います。その作品が本阿弥光悦の目に止まり、「嵯峨本」の製作に誘われます。嵯峨本は木活字を用いた本朝初の本格的平仮名印刷出版物。内容は方丈記や伊勢物語、謡本などを取り扱い、紙や絵、字にこだわって作られました。元和8年、「竹斎」という仮名草子に京で一番の見世として、「扇は都たわら屋が 源氏の夕顔の巻 絵具をあかせてかきたりけり」と載るほど有名になります。商人としても覚醒したようです。その頃、烏丸光広という名門公卿と出会います。彼に連れられ、宗達は公家の家々に伝わる名品を見、模写をします。その頃には屏風絵を数多く手がけており、醍醐寺からも依頼がありました。晩年は水墨画にも夢中になり、若い頃のように熱心に描くことを楽しめます。

あらすじをまとめるとこのような感じなのですが、2冊にわたるボリュームを感じさせないほど、すらすら読めると思います。推したいところはたくさんあるのですが、なにより登場人物全員が魅力的なところ。全員仕事熱心で、悪気のない人たちなのです。力が抜けているのに仕事は全うするところ、本当にかっこいいです。まさにエキスパート。主人公の依屋宗達をはじめ、本阿弥光悦、角倉与一、紙屋宗二、出雲阿国、烏丸光広、三宝院覚定...こんな素敵なお仲間が集まったら、あれだけの作品ができるよなあ、と納得させられます。宗達の周りにいる女性陣もかっこいいし、お父さんや番頭さんも愛嬌があります。

エピソードも素敵なものばかりで全部挙げたいくらいなのですが、お気に入りには鷹峯行きを打診されること。時の将軍、徳川家康はカブキ者やキリシタンを排除しており、次に目をつけたのは文化人と呼ばれる人たちでした。それによって、本阿弥光悦にも鷹峯への移住の命がくだされてしまいます。京の都から離れさせるという家康の思惑を逆手にとった光悦は、鷹峯へ居を移し、芸術村を作ることにしました。そこで、嵯峨本と一緒に作っていた宗達も誘われたのですが、断る。ここで、扇屋のぼんとして目覚めるのです！えー...めっちゃ楽しんで描いてたのになんで行かへんの...と思います、ちょっとかっこいいシーンです。

名前と作品を知っていても、彼の人生についてまで思いを馳せることはなかなか難しいと思います。私もこの本を読んで、依屋宗達という人のこと、美術のこと、当時の世相などについて興味を持つことができました。今だから思うのかもしれませんが、学生の頃にこの本を読んでいたらもっと楽しく勉強できたのに！と思います。自分の興味がある分野から少しずつ学んでいけたら捉え方も違うのかなあ...これからは生かしたいと思います。

秋といえば観光も楽しい時期なので、本に出てくる場所を巡ってみるのもおすすめです。醍醐寺や養源院、本阿弥辻子など、ガイドブック片手にお散歩してみたいかたがでしょうか。「風神雷神図屏風」の所蔵は建仁寺ですが、京都国立博物館に寄託しています。建仁寺では高精細複製作品の屏風が展示されています。そして現在、日本とフランスの友好160年を記念して、フランスのパリ市立テレルヌスキ美術館で「京都の宝 琳派300年の創造」展が開催されています。「風神雷神図屏風」も今回海を渡ってフランスに！なんとヨーロッパで初公開だそうです。日本でも10年に1度しか見られない貴重なものなので、海外の方にもぜひ見てもらいたいですね。

依屋宗達：生没年不詳。江戸時代前期の画家。京都で絵を制作販売する依屋を営みながら、弟子とともに多くの作品を制作した。作品は扇面画（扇にえがいた絵画）から屏風絵までさまざまで、天皇、貴族から大名、町人にまで広く好まれた。色を重ねてにじませる、たらし込みの技法を考えだし、大和絵を復興させ、後世の尾形光琳に大きな影響をあたえた。代表作に、国宝の『風神雷神図屏風』『蓮池水禽図』などがある。

琳派：江戸時代の絵画の流派。江戸時代はじめに活躍した依屋宗達にはじまり、江戸中期に尾形光琳が大成し、後期の酒井抱一へと受けつがれた。大和絵風（中国画などの影響を受けない日本風の絵）で、あざやかな色をふんだんに用いた、豊かな装飾性が特徴。宗達光琳派ともいう。上方の富裕層を中心に支持された。流派としてまとまって活動したわけではなく、それぞれの画家が先人に影響を受け、その画風を発展させていった。中世の物語や季節の草花を主な画題に、大胆な構図と斬新なデザインを用いて優美ではなやかな画面を追求した。絵画のほか、陶器の絵付けなど工芸の分野にも展開した。19世紀後半になると、ヨーロッパ絵画の印象派に影響をあたえた。すぐれたデザイン性は、現代の日本画やデザインにも引きつがれている。